



No.151

中部 教区通信

編集 日本基督教団中部教区
教区通信編集委員会
発行人 加藤 幹夫
発行所 〒461-0009
名古屋市中区久屋町8の6
日本基督教団中部教区事務所
電話 (052) 971-8497
E m a i l ckyo@quartz.ocn.ne.jp
振替口座 00830-7-52037
Homepage <http://uccj-chubu.com>



冗談だと思った

創世記 19章12-21節

津教会 蜂屋博寿

ソドムの町が減びようとしています。罪に満ちた人間を神様は滅ぼそうとしています。その直前に、神様の使いはソドムの町に住むロトに現れ、「あなたの婿や息子や娘を皆連れてここから逃げなさい。」そう告げました。ロトはその言葉を、娘の婿たちに知らせます。そのロトの言葉を聞いた彼らは、「冗談だと思った。」(14節) のです。神様が告げた言葉をふざけた話だと、自分に関係の無い話だと思ったのです。ではこの時、神の使いから直接、言葉を告げられたロト本人はどうだったのでしょうか。聖書は彼の思いをこう告げます。「ロトはためらっていた。」(16節) ロトは自分自身を捨てられず、どうすればよいのか解りませんでした。私たちも人生の歩みの中で、迷いためらい心が揺らぎます。信仰者にも、いや信仰者だからこそ、必ずそういう時があります。そしてその周りには、神の言葉を冗談だと思ふ人々があります。

しかし神様はそのロトを憐れんでこう告げました。「命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけな。山へ逃げなさい。そうでないと滅びることになる。」(17節) この神の憐れみと招きによって、ためらっていたロトは破滅から救い出されます。ロトが強い信仰を持っていた訳ではありません。ロトが勇敢に神様の言葉に従った訳でもありません。むしろロトは、その神の言葉を聞いても、「主よ、出来ません。私は、そこまで行くことは出来ません。近くの小さな町までしか行けません。」そう言わざるをえない人間でした。限界がある人間でした。しかし神は、ロトの願いを受け入れて下さいました。そして聖書は語ります。「神はアブラハムを御心に留め、ロトを破滅のただ中から救い出された。」(19節)

私は北海道の教会で洗礼を受けました。その頃の私は、自分の人生に挫折していました。どんな仕事も続かず無気力に過ごしていました。そんな歩みの最中、洗礼に導かれた礼拝の後、最初に近寄って来て、満面の笑顔で、握手をしてくれた一人の役員がいました。その時、「この人は何でここまで喜べるんだ。」そう思いました。やがて教会は無牧になり、忍耐の中に立たされます。そんな真冬の主の日の朝、私が目にしたのは教会の雪かきを黙々としている

その役員の姿でした。また苦勞して週報を作り、毎週祈禱会で祈る姿でした。私は信仰者の姿をその役員から学びました。それは自分に与えられた神の言葉を決して冗談だと思わない人間の姿であり、主の憐れみに委ねて生きる姿でした。その方は一人が救い出されたことを本気で喜び、神学校へ進んでも挫折しかけた私のために忍耐強く祈り続けて下さいました。

神の使いがソドムの町を訪れたのと同じ日、アブラハムはロトとその町のために、まるで神様と格闘するように祈り続けました。そして神は、そのアブラハムを御心に留め、冗談だと言うこの世の声に流されそうなロトを破滅のただ中から救い出されたのです。

誰もが心が揺らぎ、前へと進めない時が、悲しみの過去にうづくまる時があります。今、課題の中に、試練の中にある教会もあります。でも私たちは、その状況の中で既に、破滅のただ中から救い出されています。

神が本気で祈り続け格闘したアブラハムを御心に留め、ロトを破滅の中から救い出されたように、今、神は、独り子イエス・キリストを御心に留め、私たちを破滅の中から救い出して下さっています。

主イエスは神から離れた私たちの世界に入り込んで来て下さいました。アブラハムよりももっと強く十字架の上から私たちのために、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」そう命をかけて祈り、全ての人々が受けるべき神の裁きを受けて下さいました。私たちは今、その主の本気の祈りと、憐れみによって救い出されています。

過去に破れを抱えていてもよいのです。「主よ、出来ません。」そう叫んでもいいのです。私たちの限界も呻きも全て受け止めて祈っていて下さる方がおられます。だから、私たちはロトの妻のように後ろを振り返るのではなく、既に救い出されている確信の中で、前へと未来へと向かって歩むのです。そして主の赦しを身に受けながら私たちは、それぞれの教会の課題の中で、復活の主の言葉を冗談だと思ふことなく粘り強く祈りながらその福音を宣べ伝えて参りましょう。

輪島教会は1913年に創立されたと記録がありますので、そこから数えますと2024年は創立110年にあたりますが、1月1日の能登半島地震によって礼拝堂は全壊となりました。今は、教区の皆様のお祈りとお支えの中で設置していただきましたコミットハウスの仮会堂で礼拝をささげています。

いただきました伝道活動援助費はその時々に応じて様々なことに活かされてきました。例年12月のクリスマスの時期には新聞チラシの折り込み広告に教会のクリスマス礼拝の案内を掲載しています。また、教会で「えほんよみきかせ会」を行ったときにも折り込みチラシに載せました。礼拝に行くにはちょっと一歩が踏み出せないのですが、絵本の読み聞かせなら行ってみようかな、そう言って来てくださった方がいました。

役員に聞きましたところ、クリスマス礼拝の案内はもう10年以上前から行っているそうです。しかし輪島は小さな町ですので、都会のように初めての人がふらっ

と礼拝に来るということは、なかなかありません。ですが、新聞チラシに教会のことが掲載されますと、朝市を歩いている時に必ず数名の方から「先生の教会がチラシに載っていましたね」と声をかけられます。また、話したこともない初対面の人からも「神父さん」とか「教会の先生」などと声をかけられることがあります。どうして知っているのかと不思議に思いますが、この町の人たちとの小さな交わりを通して「輪島の町に教会がある」ひとりでも多くの人に教会を知っていただいで伝道のためになればいいなと思っています。

それ以外にも、新藤伝道師が按手を受けて正教師になった時、それを記念して礼拝で使用する聖書を「聖書協会共同訳」にしました。その教会備え付けの聖書を伝道活動援助費によって購入いたしました。実は輪島教会ではずっと口語訳聖書のままで新共同訳を使っていませんでした。それは、当教会もそろそろ新共同訳に移行しようかと思っていた時に、2007年の能登半島地震がありその計画が立ち消えになったからでした。

教区、地区の先人たちの祈りの中で、輪島教会が助けられ支えられていますことを心から喜び感謝いたします。

牧師 新藤 豪

活かされています 伝道活動援助費

礼拝堂に響くハンドベルの音色と共に、復活の希望を見据えて 羽咋教会

羽咋教会では、毎年12月のアドベントのシーズンに、北陸学院高等学校のハンドベルクワイアの皆さんと礼拝を共にし、午後には地域に広く告知をする伝道集会（ハンドベルコンサート）を開催しています。2007年に起きた能登半島地震の後、教会復興の祈りと共に、去年は2012年の春に新天地に献堂された新会堂で12年目、連続12回目となるコンサートを記念して中部教区の伝道活動援助費を賜り、教会案内と共に告知を新聞に折り込み、また当日の来場者とクワイアのメンバー、引率の先生方全員に、羽咋教会のオリジナルクリアファイルをプレゼントすることが出来ました。毎年お知り合いを伴って集われる方々やご家族での来場もあり、喜ばれています。とりわけ地域への告知と、クリアファイルの製作にあたり、伝道活動援助費の大きなご支援を賜りましたこと、主にあって、深く感謝をいたします。

クリスマスの喜びと共に迎えた2024年のはじまりの日に、私たちは再び大

きな地震を経験いたしました。最大震度7を記録した志賀町香能から車で10分ほどの距離にある富来伝道所（現在は羽咋教会の出張伝道地。地震後、北陸学院大学と日本基督教団の被災地支援ボランティアの宿泊地として用いられています）と、口能登に位置する羽咋教会は柱と礎が守られ、甚大な被害には及ばなかったものの、奥能登にある輪島教会の会堂は建物が裂けるように全壊し、七尾教会と関連施設もまた大きな傷を負い、それぞれの教会の教会員、教友、地域関係者の多くが被災者になりました。地震後半年を経ても尚、大きな痛みを覚える人々のために祈り過しています。神の御子の生誕を待ち望むアドベントに、心に響くハンドベルの音色と共に語られた御言葉が確かな希望となり、地域が復興と再建を見据えて再び歩み出す力づけとなりますように、主にある家族のお祈りへの心からの感謝と共に切に願います。主の御心がなされますように。

牧師 内城 恵





金沢元町教会 まつばらのぞむ 松原 望

今年の4月に金沢元町教会に着任しました松原です。よろしくお願ひします。

1983年に東京神学大学を卒業し、奥羽教区に、次いで兵庫教区に転任しました。その時、近くの教会で牧会していた先輩の牧師から、詩編46編10節の言葉を教えていただきました。その牧師が転任した時に、この御言葉によって決意を与えられたそうです。

「汝等しづまりて我の神たるをしれ」。

私が兵庫教区を離れ、大阪教区へ、さらに九州教区へと転任する時、この御言葉を繰り返し朗読しました。そして今回は特に、このみ言葉が私に中部教区に転任する決意を与えてくれました。主の御心に従ってキリストの体なる金沢元町教会に仕えていきたいと思っています。また、中部教区の皆様とともに主の道を歩みます。よろしくお願ひします。



飛騨高山教会 しらすなせいいち 白砂 誠一

献身40年目に与えられた新たな召命である。23歳の際に東京神学大学に献身した。それから数えて40年になった。その間に大きな転換を今回の招聘にあたって覚えた。それは、相対主義（ブルトマン）と絶対主義（バルト）の融合（ティリッヒ）という視点である。日本にプロテストティズムが紹介（大木英夫）されて久しいが、その神学理解による宣教論は未完成だと思う。諸宗教との対話を持ちながらキリストの体なる教会の形成という視点から福音を伝えたい。130年程前に飛騨高山にアライアンス教団（米国）から遣わされた女性宣教師によって福音がもたらされた。全ての人への伝道をモットーに、これからも喜びの音信を伝えたい。愛唱聖句は詩編23編、ローマ書12章15節。愛唱讃美歌は讃美歌21・575「球根の中には」。新潟県上越市出身63歳。早寝早起きが得意。



鳥羽教会 はたまきの 畑 雅乃

主の招きにより、鳥羽教会に遣わされました畑雅乃です。私は、「なぜ自分が生かされているのか」を問い生きてきました。その問いに語りかけるように聞こえてきたのが、

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3:16）の御言葉でした。そこで何度も主の御前に立ち帰ることが出来ました。主が私を教会へと導いて下さったのです。この極みまでの神の愛の中で生かされていることを知った時、そこで生きる幸福を知りました。神の愛の中で生きる幸福は、礼拝生活の中で確かにされてゆきます。その礼拝生活によって、私たちは主を証しする者として用いられます。鳥羽教会の皆さまと礼拝生活の恵みを味わい、共に神の国を目指し、主の証人として用いられ続けたいと願ひます。



こころの声

最近、近所に病院の看板が立てられました。若くて健康そうな医者が嬉しそうに胃カメラを持っていきます。前を通る度に、なんだか胃のあたりがムズムズしてきます。現代では顔が見えない相手は胡散臭く思われます。なので教会のホームページにも牧師の顔を載せます。戦略的には正しいのです。

しかし疑問もあります。以前、牧師が礼拝の中の黒いガウンを着る理由について「存在を隠すため」と教えられました。講壇の上の牧師は神の言葉を伝える道具に過ぎない。会衆は語られる言葉を神の言葉として聴く。最も優れた牧師とは、その名前も表情も信徒の記憶にも残らない者だと。

情報化が進み言葉が濁流のように人間関係を押し流す現代にあつて、教会は世の腐葉土としての役割を負っていくべきだと、私は考えます。生え出でる瑞々しい若葉の幻のみに望みを置くのです。

桑名教会 辻 秀治

林正史牧師を悼む



「(炊き出しは)強い人が威張って皆を支配するのではなく、弱い人に仕えていこうということです。それを見ると安心します。なぜなら、自分が弱くなった時にも、そうしてくれると感じられるから」。6月の「偲ぶ会」で紹介された林牧師の言葉です。雑談の中での「申命記は興味深いですよ」との一言を思い出します。林牧師の取り組みは、困窮者支援の大切さを語る申命記やイエスの言葉－聖書に聴き、応える業でした。悪天候で炊き出し休止の際、緊急食を準備し会場に

集まった方へ配り、新型感染症で活動が縮小する中では、配食に工夫を凝らしていました。美味しさも追求しながら。会場へ来られない方へお届けすることも。利用者さんお一人お一人の心の声に耳を澄ませ、仕える歩みを重ねた林牧師。牧者とは、林正史牧師の生き方なのだと思えます。

名古屋中村教会 岡 健介

有田典生

中部教区の交わりは、2009年4月の内灘教会時代から始まりました。2019年3月末までの10年間、石川地区の活動を通して豊かな学びと信仰の交わりを与えられました。特に、北陸神学会の教師研鑽では、富山地区、石川地区、福井地区の教師が、正教師試験の課題を各自の課題として親身に分かち合ったことを忘れることが出来ません。更に、一泊二日の教師研修会では、地元特産品の豊かな夕食と夜の充実した語らいの時間を与えられました。

2019年4月鳥羽教会に着任し、三重地区活動における研修と信仰の交わりを与えられました。三重神学会では、一貫して説教の学びを共有できたことは感謝でありました。

中部教区の豊かな研鑽と信仰の交わりの中で隠退の時を迎えられましたことを心から感謝致します。

隠退して

大塚信明

中部教区総会の隠退教師感謝会において、井ノ川勝牧師から経歴やねぎらいの丁寧なお言葉をいただき、誠にありがとうございました。先に、加藤幹夫議長からもお手紙をいただき身に余る光栄をかみしめています。半年の空白がありましたが、私のような者が81歳になるまでの56年間、飛驒の地で教会の業に仕え続けて来ることができたのは、主なる神さまの導きと励まし、そして、中部教区のみなさまのお祈りとお支えをいただいていたからであります。心から感謝しています。家族を含めて6名で飛驒伝道所としてスタートし、「いつかは10名以上で礼拝したいな」との夢はしばらくはきかれず、弱気になったこともありました。「長ければ良いというものでもない」という言葉もありますが、私は飛驒という井の中の蛙としてしか生きられない存在だったのかもしれない。

これからも、飛驒高山教会の礼拝に静かに・静かに出席させていただきます。諸教会とみなさまに主の祝福が豊かに注がれますように。

日進教会解散にあたって

日進村の初穂となった塚本孫平氏は、徒歩で名古屋市内の教会(現・名古屋教会)の礼拝に通い1885年阪野牧師より洗礼を受けました。その後、日進村にも信徒が増え、1935年には塚本家の敷地に会堂(現在の会堂)を献堂し、伝道所として承認されます。初代のブカナン宣教師の後、名古屋桜山教会・橋田利助牧師が戦中、戦後と兼務し、以後桜山教会の牧師が兼務してきました。

戦後、教勢が増えた時期もありますが、不便な立地、専任牧師不在のためか出席者は徐々に減少し、それでも礼拝を守り続けてきました。しかし、会堂も老朽化し、

将来を考える時期が来ました。最後まで教会を守ってきた塚本千寿さんと二人の会員、牧師、塚本家のご家族が話し合いを重ね、閉鎖という辛い決断に至りました。神に示された時と信じ、教会解散の手続きをすすめ、教区・教団に承認されました。会員は4月から桜山教会員となり、教会の原簿も引き継がれます。日進教会は愛知地区の福音伝道のための一粒の種となったことと信じています。

元日進教会兼務牧師

田中真希子(名古屋桜山教会)